
東方超雷光

雷道一茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方超雷光

【Nコード】

N7245Y

【作者名】

雷道一茶

【あらすじ】

ある日自分の頭上に雷が落ちてきて死んでしまった空守 来は白い空間にいた。いきなり頭に声が響くところは神がつくり出した空間らしい。なんか神が間違っただの頭上に雷を落としてしまっただは死んでしまったらしい。なんでも願いを五つ叶えて並行世界の地球に転生させてくれるとか。最強・チート・転生もの注意!!!

プロローグ

……うう……ここ……ここは？

俺は、目が覚めると何も無い白い空間にいた。

周りを見渡してみるが、やはり真っ白でなにもない。

俺は、何故こんなところにいるのか思い出してみようとするが何も思い出せない。

だが、名前などは覚えている。俺の名前は空守そらかみ 来らいという。普通の高校生だ。

家族は、みんな事故で他界してしまっただけからはアルバイトをしながら一人で暮らしている。

俺は、自分についての情報をまとめていると頭の中にこえが響いた。

『人間よ』

だ、誰だ?!

俺は、周りを見渡すが誰もいない。

『私か？私は君たちで言う神という存在だ』

神だと？

『ああ、そつだ人間よ』

……証拠でもあるのか？

『証拠か……』

神がそつ言つと

『そつだな、お前の両親はお前が中学生のころに交通事故で死んだんじゃないか？』

！???な、なんでそのことを!!!???

『私が神だから……じゃ駄目かな？』

………わかった、信じるよ。

『そつか、ありがとう』

それで俺は天国か地獄のどちらかに行くのか？
俺が、そう神に聞くと神は

『いや、行かない』

神がそうやってきた。俺が、なぜだ？と聞くと神は

『君の場合は私が殺してしまったという例外で転生させることにな
っている』

転生？あの二次創作とかによくある？

『ああ、そうだ。それに転生するに置いて五つの願いを叶えてあげ
よう』

叶えてやると言われてもな、まずどんな世界に転生するのかわから
ないと決めようがないんだけど。

『君は地球の並行世界に転生する。細かく言えば東方project
tという世界だ』

東方project？

俺はなんだそれ？と思って神に聞いてみると同人ゲームの世界らしい。

そのほかにも小説や動画も作られているらしいってなんでそんなに詳しいんだよ？

俺がそう言つと神が『……………秘密だ』と言って教えてくれない。

別に秘密にする必要はないと思うけど……………俺がそう思っている
と神が急かすように言ってきた。

『それで、願いはなんだ？早く言ってみろ』

……………どうゆう世界かはわかったけど、その世界にはどんな能力
を持ったやつがいるんだ？

『そうだな、有名なので言えば境界を操る程度の能力とか、主に空
を飛ぶ程度の能力があるな』

境界を操る？よくわからん能力が出てきたな。

それに、「主に」空を飛ぶというのはどうゆう意味だ？

なんで、程度なんてものがつくんだ？別につけなくてもいいと思う
が。

俺がそう考えていると神がいきなり俺の疑問についての答えを言っ
てきた。

『仕方ない、君の疑問に答えてあげよう』

えっ？俺口に出してたっけ？
そう俺が言ったがスルーされた。

『まず境界を操る程度の能力についてだが、この能力はだた物理的な境界つまり空間とかのことを指すな。それだけじゃなく夢や現実・物語の中と外といった概念的境界も操る事が出来るチート能力だ。次は主に空を飛ぶ程度の能力について教えてやろう。これは重力から浮いて無重力になって空を飛ぶほかに、精神的なものや物質的なもの等ありとあらゆるものから浮くことができ、どんな攻撃もすりぬけてしまう言わば無敵能力さ。最後になぜ程度と付くのかだが、
.....分からん』

.....ハ？

結構期待させといてわからないって、神だろ？
俺がそう言つと神は焦ったように

『し、仕方がないだろう！私にだってわからないことの一つや二つあるわ！？』

そーゆーものかー（棒

『なんだ！？その棒読みは！？』

ごめんごめん、それで能力だっけ？

『あ、ああ、そ、そうだ（切り替えが早いな。いや、それは私もか）』

能力があゝなんかあるかな、………待てよ、別に能力じゃなくてもいいんじゃないか？俺はさっそく神に聞いてみた。

なあ、別に能力じゃなくてもいいんだよな？

『ああ構わないぞ』

それじゃあ、ずっと幸福でいられるようにしてくれ。

『わかった。だがそれは能力の部類に入るぞ？』

えっ？そうなのか？俺がそう聞くと神は

『ああ、東方 project の世界には無いが新しく能力を作れば「永遠に幸福である程度の能力」なんかがいいんじゃないか？』

なるほど、そんなかんじなのか。なら「ありとあらゆることの答えを出す程度の能力」とかは？

『つまり、答えを出す者だな』
アンサーターカー

なんで知っているんだ!?

俺は心の中でそう叫んだ

『わかったぞ、後三つだ』

まだなにかあるか?.....そう言えばこの世界ってかなり危険なはずだよな?身を守る能力が欲しい所だよな、でも何にも思い付かないし、神のお任せでいいかと思ひ神に言った

自分の身を守る能力なら何でもいいよ

『つまり、私に決める.....と?』

コクつと俺は頷いたすると神はわかったと言って

『私に任せたことを後悔するくらい最強の能力を授けてやるう』

.....何だろ?神に任せたのは失敗だったか?
俺がそう考えていると神が確認するように言ってきた

『君の能力について確認するぞ?「永遠に幸福である程度の能力」に「ありとあらゆること」の答えを出す程度の能力」でいいかな?そ

れと、三つは私が決めるということで』

ああ、それでいいよ

俺がそう言つと神は最後にすまなかつたと言つと目の前に金色の扉が現れた

『この扉を通れば自動的に転生される』

そうか、と俺が答えると扉へ向かって進んだ。すると神が達者出なと言ってきたので俺は

おう、とだけ言つて扉を通つた

第一話

チュン チュンチュン

んっ？……………朝なの……………か？それにしても暗くないか？……………そうか、瞼を閉じているからか。
俺は、この真っ暗な世界から明るい世界に行くため重たい自分の瞼を開いた。

んっ、やっぱり眩しいな。流星は太陽の光だ。俺の眠気を一気に覚ましてくれた。けどどなんか身体中が痛い。まるで地面に寝たみたいだ。俺は周りを見渡してみる。……………特に変わった所は無い。森があるだけだ。……………森？なんで森なんだ？！……………ああ、思い出した。たしか神に転生させてもらったんだっけ？とうゆうことはここは東方 projectの世界ってことか？でも神もこんな森の中に転生させなくてもいいのに。何か出てきたらどうするんだ。身を守る能力については三つ任せて頼んだけど俺は知らないぞ？どんな能力か。……………失敗したあああああ！！！！？？？

俺は、負の念を心の中で叫んだ。

三つ貰っても知らなきゃ使えないじゃん！？いや待て、神がそんな浅はかなことをするはずがない。
きつとポケットとかに能力についての説明書みたいなものとかがあ

るはずだ……………多分。
俺はさっそくポケットの中を調べてみた、……………やっぱり有ったぜ。
少し分厚い紙が。俺はその紙をポケットから出して見てみる。
そこには、

『のーりよくせつめーしよー5歳の子供でも分かる
簡単編！ー！』

……………表紙は無視しよう。うん、無視だ無視。大事なのは中身
の内容だよ、表紙なんてどうでもいいんだよ。
俺は、まず1ページ目を開いて見てみる。

『まずうー「永遠に幸福である程度の能力」についての説明でえー
す。』

今思ったけど漢字使っている時点で5歳の子供読めなくね？それに
少しイラつくんですけど？

そう思いながらも俺は説明書を読んでみる。

『まず、この能力についてですけどおーその名の通りにいーずじじ
うううじじじと幸福になれちゃいまあーす。いやーいいよねえーず
じじじううじじじと幸福なんて……………ねえ？』

…………… イラつく!!! 破り捨ててええええ!!!
?????????

いいいいいや!!! 破り捨てた後に燃やして灰にしてやりてえええ!
!!!

いや!でも待て!!! 耐える耐えるんだ!!! 俺!!!!!!

これを破り捨てて燃やしてしまったら俺の身を守る能力について永
遠に分からなくなるじゃないか!!!

まずは落ち着こう、ヒーヒーヒーヒーヒーヒーヒー。

…… よし、落ち着いたぞ。俺は続きを読むため次のページを開く。

『つ・ぎ・はわああ「ありとあらゆることこの答えを出す程度の能力」
について説明しまあす。』

…………… これって多分あの神が作ったんだよな?だとしたらかなりキ
ヤラ崩壊というかなんというか…………… でもきつと違うよな、きつと

…………… じゃないとキモいし。まあ、続きを見ようか。

俺は自分の思考から抜け出して視線を説明書に向ける。

『この能力はあわ超便利でえ〜す。本当にい〜どんな状況う、疑問、
謎とかのお〜いろんなことについてえ〜瞬時に答えを出してえ〜く
れますう〜。』

…………… もしかして、この能力で俺の身を守る能力分かるんじゃ
ない?

俺のバカヤロウツツ!!!?????なんで自分で頼んだ能力の事思いつ

「なる程度の能力」でえ〜すう。」

超人？何だ、スパ ダーマンとかウル ラマンとかスー ーマンあたりのことか？

『せい〜い。でもどれかって言うとう トラマンのほづが近いかなあ〜？』

………なんで、俺の考えている事がこの説明書に書いてあるかは無視しよう。

でもウルト マンに近いってもしかして凄いチートなんじゃないのか？

『そうだよ〜すごいチートだよ〜ん。身体能力なんて ルトラマンだし〜しかもお、色々な超能力に気力だつて使えちゃうんだからあ〜ん。生命力とかだつてえ〜不老不死にすつごく近いしそれに宇宙や水中でも活動できるしねえ。あつ、でも攻撃の光線技とかは使えないからあ〜例えばスペ ウム光線とかねえ〜。』

えっ！？なんでだよ！？？使えてこそそのウルトラ ンだろ！？？
実際はウルトラマ じゃないけどさ！！？？？

『たしかにい〜攻撃の光線技は使えないけどあ〜それ以外の光線技なら使えるから安心してねえ〜ん。』

どういうことだ？

俺はその疑問を解決するため続きを見る。

『そうねえん。例えばあゝ誰かに自分のエネルギーを与えたりとかあゝ壊れたものを修復したりする光線技は使えるのよねえゝ。わかっただかしらあゝ？』

それなら、ス シウム光線とかも使えるようにしろよ。

『さあゝて、次は二つ目の能力「電気と雷を司る程度の能力」について説明するわねえ。』

……………俺のこの質問については無視かよ……………

まあいいや。それで？電気と雷を司る程度の能力か？見る限り電撃系の能力だよな。

でもなんで電気と雷を司るなんだ？どちらか一つでいいと思うけど

……………

『そうだねえゝ、電気を司るだけであゝ電気全般を操る事ができるけどあゝ雷を発生させる事とかができないのよあゝそれに雷を司るだけであゝ雷は操れるけどあゝ雷じゃないただの電気とかは操れなくなるのさあゝ。分かったあゝ？』

なるほどね、よくわかったよ。

ほかにはどんなことができるんだ？この能力は。

『さつきも言った通りいゝ雷と電気を操る事が出来るしいゝ雷の発生や雷速での移動にいゝ電熱を発することができるんだよゝ。それにいゝ自身の体を電気と化すことで攻撃を受け流すことができるしねえゝ。まだ、他にもあるけどおゝ長くなりそうだからあゝそれは自分の能力で調べてねえゝ。』

つまり、ありとあらゆることの答えを出す程度の能力で調べろってことか。

よし、とうとう次で最後になるのか……………永かったぜ……………ッ
！！！？！？

俺は最後の能力説明を見るのに気合を入れ直した。

そして俺は、最後の能力説明のページを開く。

『とうとう最後の能力説明になったな。』

えっ！？まさかの普通文章！！！？？なんでここに来て普通の文章にもどってんだよ！？？

どうせなら最初っからこういう真面目な感じの文章にしてくれよ！？？
すっげー……………疲れたぞ！！！？？？

『だってそれの方が面白そうだったからな』

こいつ……ッ!?

ぜってえードSだなッ!?

もうイラつくかないって言ったけどもう我慢できねえ……!?

今度会ったらぶ・ち・こ・ろ

・す……ッ!??

俺は心の中で誓いを立て、最後の説明文を読む。

『さて、最後の能力についてだけこの能力の名前は「無にする程度の能力」だ。』

無?ないってことだよなつまり。

『そつだよ。無にする、つまり無くす・無かったことにすることが出来るんだよ。』

まんま大嘘憑き(オールフィクション)じゃねえかよ。

『うん、まあな。でもこれは自分か自分が触れたことがあるものしか効果がないからな。でもその代わりに無くす・無かったことを無かったことにできるからな。』

……ホント、チートだな。

しかし俺としては、

最後のテヘツ　が気に入らない！もう少し悪かったと思えよ！？
絶対こいつ笑ってるぞ！？あつ、でもこいつドS（多分！）だよ
な？

こんなこと思っていたらやつと思惑通り（多分！（キリッ）なんじ
やないか？

………　フッフッフツ…　もう俺はこいつのペースに乗らないし、ツツ
コミを入れないぞ。

俺はそう誓い最後にもう一度説明書の追伸を見る。

………　えっ？
言葉を失った。だって最後に！

『by　女神様？』

って書いてあるんだから……　ツ！！

あいつ、女だったのか………　！！！！

全然わからなかったぞ！？姿が見えなかったとはいえ！？？
結構最初の方に驚かないと言ったが、これには素直に驚いた。
だって女神だったなんて！チクシヨウ！？俺は紳士だ！
女をぶち殺すことなんてできないぞ

………　クソツ！！！！
ぶち殺すのは諦めよう。女じゃ手が出せないからな。

第二話

やあ、こんにちは。空守 来だよ。実はな、いきなりだけどあの忌まわしい爆発事件？から百年経ったんだよ。えっ？なんで百年経ったのが分かったのかって？そんなの能力で調べたに決まってんじやねえか。わからねえやつは、第一話を見る事だな、でもこの能力にはデメリットがあつて、多用すると脳に負担がかかって意識が飛んじまうんだよ。だから大事な事にしか使わないようにしているんだって何言っているんだろうな俺は。

百年も生きてとうとうボケてきやがったか？はあゝ嫌だよねホントに。

あつ！そうそう！この後いつ人間が誕生するかだけど、後九百年位はかかるみたいみたいなんだ。

妖怪とかだったら後七百五十年位したら誕生するらしいんだけどな。

恐竜みたいなのはもう居るんだけど……………

それに、この百年間で俺は強くなった。能力を完璧に使いこなせるようになったしね。

能力の効果だつて上がったんだからな。電気と雷を司る程度の能力の電圧だつて十億Vから十一億Vにあがったし、雷速の移動速度だつて200？/秒から225？/秒に速くなったしな。

でも、なんで雷より速く移動できるようになったかと言つと、俺の能力の一つで無にする程度の能力で俺の能力の限界、つまり雷の速さの限界を無くしたんだ。だから俺は雷より速く移動できるようになったんだよ。

いやあゝホント便利だぜ。

それに超人になる程度の能力で、気力やいろいろな超能力だつて、使いこなせるようになったしな。身体能力だつて少しではあるが上がった。なぜ少しか上がってないかと言つと、身体能力より気力

や超能力を使いこなせるように鍛錬したからだ。そのお陰で気力・超能力がちゃんと使えるようになった。
まあ、この百年の成果はこの位かな？
それにしても、

「さっさと人間誕生してくれないかな。」

これは、俺の心からの願いだ。早く人間に会いたい。
伝説のウル　ラマンみたいに時を越えられないか試してみたが無理だった。

でも、毎日鍛錬をしていればできるようになるらしい。

俺としてはさっさと時を越えてこの恐竜のいる時代からおさらばしたかったのだがな。

まあ、超能力とかの実験台になってくれたのは感謝しているが……

……

恐竜たちが実験台になってくれたおかげで電撃をウルト　マンの光線技みたいに放つことができるようになったわけだけど。

いやあ〜あの時は本当に泣いて喜んだね！

それほど嬉しかったんだよ。みなさんに見せたいくらいだよ。

で、みなさんって誰だよ？やばい、またボケが………ハア〜。

俺はもうだめなのか？と思い、ため息を吐いた。

その時、

『グギャヤヤヤツツ！！！！！！！！！！』

鼓膜が破れるような遠吠えが聞こえた。

俺は「あいつか…」とめんどくさそうに言った。
この遠吠えは俺がいつも相手をしている恐竜の遠吠えだ。
いつからこの遠吠えの恐竜の相手をしているかと言うと、もう5年
は経つ。
いつも俺に挑んでは、俺の技の一つで興奮を抑制する働きがある光
線をくらっては、戦意喪失して帰って行くのだ。
何故一々こんなことをするかというと、俺はめんどくさい事は避け
たいからだ。
来るなら俺が鍛練をしているときに来て実験台になってほしいもの
だ。

ドスン！！ドスン！！ドスン！！

大きな足音が聞こえ、俺はその方向を見る。
そこには、やつが俺をまっすぐ見据えていた。
やつとの距離もざっと見て50〜60m位だろう。
どちらもう動き出そうとしているが隙がない。
やつは、また会ったびに強くなっている。
どこかで鍛練しているのかと思うくらいの伸びだ。
いや、でも俺と一応戦ってはいるからそれでそれなりに鍛えられて
いるのかな？
ハハハ、そんなわけないか。

『ゲガアアアツ！！！！！！』

?!?!

俺が思考している間にいつの間にかやつは目の前にいて俺を襲ってきた。

俺はそれをジャンプをしてかわした。

そしてマツハ１の速度でやつ尻尾のあるところへ移動し、尻尾を掴みジャイアントスウィングお見舞いしてやった。

やつは160m位吹っ飛んだ。だがやつは何事も無かったかのように立ち上がりこちらに向かってきた。

「おいおい、無傷かよ。半分くらいの力で投げ飛ばしたのによ。」

マジで強くなつていやがる。防御力も上がつていやがるのか？あのスピードといい、なんなんだ？あいつはよ？この分だとパワーも相当上がつてんじゃないのか？

一回力比べをしてみるのもいいかもな！

俺もやつに向かい飛び蹴りを放った。だがやつは俺の飛び蹴りを腕で受け止めて俺を投げ飛ばした。

俺は空中で体勢を立て直し地面に着地した。

俺はやつのが俺の予想を遥かに上回っていることに驚いた。

まさか俺の飛び蹴りを難なく受け止めるとはな…。

もう少し力比べをしてから、ライトフルレクト（興奮抑制光線）を放つことにするか。

俺はそう決めるとやつに瞬時に近づき、顔面にパンチを打ち込んだ。やつは少し怯むが、すぐこちらに尻尾を振りまわして攻撃してきた。俺はそれを飛行してかわし、今度は8割位の力でもう一度やつに飛び蹴り放った。

やつもすぐさま俺の攻撃に反応して、巨大な腕で俺の飛び蹴りを受け止めてきたが蹴りの力に押されて、後ろへ吹っ飛んでいった。俺は「もういいかな？」と思い、俺の技の一つであるライトフルレク

トを放つ。

右掌から放たれた光の粒子がやつを包み込み、やつの戦意を無くしていく。

俺の右掌から光の粒子が消えたと同時にやつは戦意喪失し、帰って行った。

まったく、あいつには学習能力というもんがないのか？

でも今度からはちゃんと身体能力の方も鍛えないとな。

じゃないと身体能力でいつか俺あいつに負けるぞ、絶対に。

まずは、腕立て伏せ1万回位かな？

新たな目標？ができる俺はさっそく行動に移そうとしたが……………

グウウウ~~~~

……………まずは、腹ごしらえが先だね。

俺はそう思い、古代の魚を捕獲するため近くの川に向かった。

第二話（後書き）

今回使用した技解説

ライトフルレクト

白い光の粒子を右掌から放ち、相手の感情を静めておとなしくさせる、興奮抑制光線。

第三話

「9万9985回、9万9986回……」

おゝす。俺、空守 来だよ。俺が自分の体を鍛えて900年はたった。もちろん能力の方もちゃんと鍛えてるぜ。

今もその最中さ。

俺は今、直径数百mの巨岩を片手で持って腕力を鍛えている。こんなことをやっていると本当に自分が人間なのか疑問になってくる。

「9万9999回……10万回ツと！よし！今日はここまでにしとくかな。」

俺は、持っている巨岩をゆっくり地面に置く。すると、少し離れたところから栗色の髪を肩まで伸ばし、瞳も栗色の小さな女の子がやってきた。

「お疲れ様です！来さん。」

その女の子が言うと、俺に大きな葉っぱをコップの形にしたものを渡してきて

その中には澄んだ水が入っており、俺はその水を飲んだ。

「ゴクツ、ゴクツ、ふう〜。生き返ったあ〜ありがとう。栗菜^{くりな}。」

俺はそう言つて栗菜の頭を撫でてあげる。

栗菜は、「えへへ／＼／＼」と嬉しそうに目を細めていた。

この子は、人間のように見えるのだが実は妖怪である。

まず人間自体生まれてないしね。

栗菜との出会いは10年前に遡る。

あれは、俺が修行していたときだ。

助けて！！と悲鳴が聞こえたのだ。俺はその方向に行つてみると血だらけの少女が恐竜に襲われていたのだ。俺は、その女の子を助けようと恐竜に電気と気を纏った飛び蹴り・ライジングキックを放つ。

恐竜はライジングキックをくらうと数十メートル位吹っ飛び、絶命した。

俺は、急いで女の子に近寄り無事かを確認した。

見た感じは大けがに見えるがそこまで酷くなく、回復光線・ライトフルエイドを浴びせて回復させた後、

気絶していた少女を寝かせた。

少女は2時間くらいすると目覚めた。

最初は俺に怯えて泣いていたが、なんとか泣き止まず事が出来た。いやあ〜たいへんだった。前世じゃこんな子供の相手なんてしたことはないんだからよ。

それで、なんで襲われたのかを聞いてみると一年前に親に捨てられて、一人で旅をしているところ

あの恐竜に襲われたらしい。
うう〜辛かったろうに（泣

俺はこの子に「家族にならないか？」と提案したところ、目を潤ませて「いいの？」と首を傾げて言ってきた。俺はロリコンではないが、かわいいと思ってしまった。

一瞬ロリコンになろうかなと思ったほどだ。

反則だろ？潤ませた目で首を傾げるなんて。

俺は「いいよ！」と即答した。

すると少女は、泣きながら喜んでくれた。

俺も嬉しかったよ。話す相手ができたし、この子も嬉しそうだったし。

まあ、これがこの子との出会いだ。俺はこの子と出会えて本当に良かったと思っている。

俺から言わせてみればこの子は、天使のような存在だ。

「?どうしたんですか？来さん？」

俺が昔に耽っていると、栗菜が頭の上に？マークを浮かべながら聞いてきた。

「いや、なんでもないよ。ちょっとお前と出会ったときのことを思い出していたんだよ。」

「そうですか。……………あのときは本当にありがとございました。

来さんには感謝してもしきれません。」

そう言つて栗菜は頭を下げてきた。

まったく何を言つてるんだか。感謝してるのは……

「俺の方なのにな。」

「何がですか？」

「いや、何でもないよ。」

「そうですか？」

俺は笑いながら「そうそう」と言つて、誤魔化した。

栗菜は俺を妖しげな目で見てきたが無視だ、うん。

こんな可愛い栗菜であるが実は16歳だったりする。

見た目は幼女なのだ。

妖怪とはやはり成長が人間より遅いのだろうか？

「なあ、栗菜。」

「なんですか、来さん？」

「栗菜って16歳だよな？」

「はい、私は今16歳ですよ。」

「なんで初めて会った時と同じ姿で成長していないんだ？」

「さ、さあ？それは私にもよくわかりません。」

「ですよねえ。それと栗菜って何の妖怪なんだ？」

「10年も一緒に居るのに何の妖怪か聞いてないって………まあ、能力を使えばすぐ分かるけど脳に負担がかかるしそれにプライバシーの侵害もあるからね。」

「あれ？言ってますでしたっけ？」

「たしか言ってたはずだ。」

俺がそう言つと、少し思考している顔になり、やがて顔を上げて

「……………そうでしたね。」

と言ってきた。どうやらさっきは自分の正体を言ったか言ってなかったかについて思い出していたらしい。

「ああ。それでなんなんだ？」

「それでは言いますね。……………私の正体は……………

……………ッ?!」

「栗菜の正体はッ?!?!」

「私の正体はッ?!?!?!」

「栗菜の正体はッ?!?!?!?!」

「……………わかりません。」

ズテッ……………!!!

ここまで引き延ばして置いて分からないのかよ?!
思わず頭を地面にぶつけてしまったぞ?!

「分からないって、何で何だ？」

「教えられる前に親に捨てられてしまいましたから。」

「……………その……………ごめんなさい。」

「いいえ、もういいんです。私は今は幸せですから。」

「栗菜……………ありがとう。」

「だから良いですって／＼／」

ハハハ、照れてるな。それにしても幸せかあ。
嬉しいよな、誰かが幸せだと自分も。

俺は栗菜を見ている。何かこっちに頭を向けてきている。
やれやれ、頭を撫でろってか？良いだろう。撫でるからには徹底的
にやっつけてやるぜ！……！

ナデナデナデナデ。

「ふにゃ／＼／＼／」

何だろう、猫みたいで可愛いんだけど。

俺はさらに撫で続ける。

「ふにゃにゃ／＼／＼／／／」

……抱きしめてもいいかな？

「ふにゃふにゃにゃ／＼／＼／／／／／」

……よし、抱きしめよう。

ギョツウウウウウウウ！！！！！！

俺は栗菜を抱き締めた。それに驚いた栗菜は

「?!!!ニヤニヤニヤ——————!!?!?!?!」

猫みたいな叫び声を上げた。……もしかして栗菜って猫又なん

じゃないのか？でも尻尾がないしな。
調べてみるか？よし、さっそく許可をもらいますか。

俺は栗菜を抱きしめるのをやめ、栗菜に聞いてみる。

「栗菜。」

「ハア、ハア：な、なんですか？！いきなり抱きついて！！」

「ごめん、ごめん。それよりさ、栗菜の正体を知りたくないか？」

「ふえ？分かるんですか？」

「まあね。能力を使えば分かるよ。それでどうする？」

そう言つと栗菜は即答で、

「知りたいです！！」

と言つてきたので俺は「OK」と言い、能力をしようした。
あゝ頭痛い。でも、そのおかげで分かった。

「分かったぞ、お前の正体が。」

「本当ですか!？」

「あ、ああ。お前の正体は仙狸せんりと言って猫又って言う妖怪が年経て神通力を身に付けた存在だ。後、猫又って言うのは猫が妖怪になった存在だよ。」

でも猫なんてこの世にまだ存在してないはずなのになんで猫又が存在しているんだ？

しかもそんなに生きてないのにもう神通力を身に付けているなんて…なんでだ？

俺はもう一度能力を使い調べてみた。

……………マジ痛いです、それとマジですか。

調べてみたところ、猫はもう存在しているらしい。

俺は見た事ないが、普通にいるらしい。

仙狸なのは栗菜の親が仙狸だったかららしい。

それと猫又に見えないのは変化の術を使っているらしいんだが。今日だけでも三回位能力使ったぞ……………痛い(泣

「あゝ来さん、思考中のところ悪いんですけど。」

「……………なんだ？」

「私、猫又なのになんで尻尾とか生えてないんですか？」

「どうやら栗菜もその事に疑問を感じていたらしい。」

「それはお前が変化の術を使っているかららしいんだけど心当たりないかな？」

「変化の術ですか……………あッ！そう言えば昔、私がまだ2〜3歳だったころお母さんになりました。そうです！！気に入ったからそのままにしていたのを忘れていました！」

そう栗菜が言ったと同時にボンツ！と栗菜の周りに煙が出て、煙が消えるとそこには栗菜の容姿に栗色の猫耳、三本の尻尾を生やした姿になっていた。

「それがお前の本当の姿か。」

「はい、来さんのおかげで本当の姿に戻ることができました。本当にありがとうございます。来さん。」

そつ頭をペコリと下げながら言ってきた。

「別に頭を下げて礼を言わなくてもいいよ。それより飯食おっせ。」

「はい!」

「今日は栗菜の正体がわかった祝いで魚にするぞ!」

「本当ですか!?わーい!」

ぴよんぴよん跳ねながら喜んでいる。

「ならさっそく川に行って魚を取りに行くか!」

「はい!」

俺たちは魚を食べるため川に向かった。

第三話（後書き）

今回使用した技解説

ライジングキック

足に電気と気を纏い放つ、超強力な飛び蹴り。

ライトフルエイド

青い光の粒子を右掌から放ち、生物の傷・病気を治す、回復光線

なんて思っていた時期が俺にもありました、はい。

俺は人間が生まれて100年位経ってから人間を見に行った。

何故100年経ってから見に行ったかと言うと、俺自身修行をしていて人間の存在自体忘れていたからである。

人間、なにかに夢中になっていると大切なことも忘れちゃうよね。

おっと、そんなことはどうでもいいんだよ。そんなことよりもだ。

俺は人間を見に行つて……………絶望した。

だつてよお…あんなの……………

猿じゃねえかあアツツ!!?????

なにがウホツ!ウホツ!!だよ!!???

あんなの少し知性を持った程度の猿じゃねえか!!

ちくせう!!俺もバカだよな。

少し考えれば分かることじゃねえか。

人間が生まれてもまだ猿人だってことはよ。

もう見た瞬間ズーンだったわ。涙もでたよ。

まあ、栗菜に慰めてもらったからいいけどさ。

それに栗菜も美少女から美女に変わった。

容姿も綺麗な栗色の髪も腰まで伸ばし、体も女性らしい体つきになった。

身長は164？位まで伸びて、胸の方もGカップはいつてる。

なんで知ってるかは密かに能力で栗菜の健康（発育）を毎日確認していたからな。

……おい、いまお前変態だろって言った奴、あえて言わせてもらおう。

俺は栗菜限定（多分）の変態という名の紳士だ！！

だから俺は栗菜のためならなんでもできる！！！！

なんで栗菜のことこんなに語ってるんだろ？

まあいいや。それよりも後どれくらいしたら人間並みの知識を持つんだろう？

千年単位くらいかかるかな？

まあ、その位かかったとしても栗菜がいるからもう寂しくはないけどさ。

なんか刺激のある事が起こってくれないかなあ

俺がそう思ったとき突然目の前が光だした。

光が止むとそこには円状の白い穴が出来ており、その中には金髪の綺麗な女性がいた。

「お久しぶりね！来君！」

いきなり円の中の女性が喋ってきた。

.....

「誰？」

ズゴツ！！?????

なんか女性がおもいきり向こうの地面に頭をぶつけたぞ？

それと同時に栗菜もこちらを向いて言ってきた。

「?どうしたんですか来さん?いきなり喋りだして?」

えっ?どうしたって

「栗菜はこれが見えないのか?」

俺は、白い円状の穴とその中にいる人？を指さしながら言った。

「えっと……………何かあるんですか？」

「何かって、白い穴と人がいるじゃないか。」

そう俺が言うと栗菜は心配そうな目で見てきて

「……………さっきの事がかなり辛かったですね。幻覚を見るほどなんですから。今日はもう寝ましょう。」

えっ？寝るってまだ昼だよ？

それに俺は正常よ？多分だけどさ。

あ、あれ？ちょ、ちょっと栗菜さん？

なんで近づいてくるのかな？近づき方が怖いよ。

「あ、あの栗菜さん？なんで近づいてくるんですか？」

「それはもちろん来さんを寝かせるためです。」

「いや、いいですよ？別に寝かせなくても、はい。俺は正常ですからね？」

ますので。」

うん、なんか昨日と纏うオーラがちがうもんね。
俺もそう思えてきたよ。

そうか、なんか周りに生物の気配が感じないなと思ったたらこのオーラのせいなのか。

そんなに俺を寝かせたいのか。だが……………

「断る!!!!!!!!!!そして逃げる!!!!!!!!!!」

俺は飛び、その場を退散した。

と思ったのだが……………

「ッグ!!!?????」

いきなり重力が倍加したような感覚に捕らわれ、俺は地面に落ちた。クソッ！！なんなんだいったい！！？

全然立てねえぞクソッ！！？？

地球の500倍の重力なら耐えられるがこれはそれ以上だぞ！！？

「ちょっと、ストップ！！ストップ！！いきなりどこかに飛んで行こうとしないでよ。探すのが大変でしょ？」

いきなり白い穴から聞こえてきた女性の声が聞こえた。そして目の前にまた白い穴が開き、金髪の女性がいた。

「お前か、重力を操っている奴は！早く解除しやがれ！！」

「そんなに怒らないでよ、今解除するからさ。」

やつが指をパチン！と鳴らすと倍加が解かれて立てるようになった。

「ふう〜助かったぜ。それとお前は誰だ？」

「私の事忘れちゃったの？悲しいわ〜」

そう言つとオヨヨヨと顔を隠しながら嘔泣きをした。
ああ、うざい。

「おい、うざいからやめろその嘘泣き。」

俺がそう言つとそいつは嘘泣きをやめ、

「昔と全然変わってないのねあなたは。」

と言つてきた。

はて？こんなうざい奴俺の知り合いにいただろうか？

知り合いといつてもこの世界じゃ栗菜しかないし。

ホント誰だ？

「あのさ、ホントに誰だお前は？」

「……………本当に分らないのかしら？」

俺はコクンと頷いた。別に能力を使えばわかるがこんなやつのは興味はない。俺達に危害を加えるならぶつ倒すだけだ。

女性はそれと同時にハア〜とため息をつき俺に向かって言ってきた。

「私はあなたをこの世界に転生させた女神よ。」

……………ああ……………ああ……………ツツ！！！！……？？？

??

あのときの駄女神か!!

「駄女神とはなによ!??」

「うおッ!?俺口に出してたか?」

「出してないわよ。こんなこと心を読めばどっつてことないわ。」

そこはさすが神様ってことか。

まあ俺も超能力で心を読むくらい簡単にできるけどな。

「でもむやみに心を読むのは止した方がいいぞ。嫌われるからな。」

「わかってるわよそのくらい。」

まあそうだろうな。

それよりもこいつはなんのようでここにきたんだ?

「ああそれはね、あなたが刺激のある事が起こってくれないかなあ
くっと思ってたでしょ?」

さっき心をあまり読まない方がいいって言ったよな?

こいつは学習能力というものがないのだろうか?

「あえてあなたの言った事は無視するわ。それであなたは言ったわよね、私がさっき言ったことを。」

「ああ。言ったな。」

「それを叶えようとしてここに来てあげたのよ。」

「そうかいそりゃどうも。でも実際はここにきてないよな。」

来たと言ってもあつちの空間とこっちの空間を繋げただけだしな。

「うるさいわね。別に良いじゃない細かいことは。」

「俺は細かい事を気にする人間なんでね。それで叶えるっていったいどんな刺激のある事を叶えてくれるんだ?」

俺がそう言つと駄女神がそうねえ〜と考え出した。
考えて無かったのかよ。やっぱり駄女神だな。

「う、うるさいわね!別に良いじゃない!」

まあ別に良いけどさ、俺も考えられるし。

..... あっ!そうだ、これがいいな。

「あのだ。」

「……なによ。」

あれ、少し怒ってるのかな？
顔も少し怖いし。ハア、まずは機嫌から直しますか。

「ごめん、さっきは悪かったよ。それにそんな怖い顔するなって。
綺麗な顔が台無しだぞ？」

俺がそう言うと駄女神は顔を茹でダコのように赤くしてこう言ってきた。

「わ、私が綺麗ですって！／＼／＼ど、どこが綺麗なのよ！！／＼／
／／」

どじって言われても、

「全体的に？」

そう言うと駄女神はさらに顔を赤くした。

大丈夫かこいつ？

「おい、大丈夫かお前？気分が悪いんなら別に叶えてくれるのは今日じゃなくてもいいぞ？」

「だ、大丈夫よ／＼／＼（こ、こいつ！鈍感なの！！／＼／＼）」

「そうか？それならいいけどよ。」

まだ顔が赤いけど本人が大丈夫って言うんなら大丈夫なんだろう。健康が第一だからな。

あれ？俺なんて言おうとッ……………あっ！そうだった！

「あのさー！」

「なにかしら？」

「ウルトラマ シリーズの怪獣を相手にしたいんだけどいいか？」

これだったらかなり刺激のある日々になるはずだ。

「そうね、別にいいわよ。それでいつ送ればいいのかしら？」

そうだな、今日は急すぎるから明日くらいかな。

「明日くらいで頼む。それと怪獣の指定はこちらでもいいか？」

「それくらいなら構わないわ。」

「そうか、ありがとう。」

俺が礼を言うと少し顔を赤くして照れているようだった。

そしてそれを誤魔化すように

「そ、それで明日はいつたいなんて怪獣を送ればいいのかしら？」

そつだなあ、結構強い怪獣と戦いたいんだよな、………ゴモラあたりでいいかな？

「じゃあ、明日はゴモラで頼むわ。」

俺がそう言つとやつは「OK、じゃあね！」と言って白い穴を閉じた。

よし。明日から忙しくなるぞ。

あれ？なんか忘れてるような？

スー スー

んっ？

俺は音が聞こえた方に顔を向ける。

そこには栗菜が寝ていた。

なんで寝てるんだ？

駄女神がやったのか？あいつがやったなら感謝しないとな。

あの状態の栗菜は俺じゃあ止められなかった。

感謝感謝だわ。マジで。

それにしてもなんだか疲れたな今日は、いろいろな事がありすぎて。結構前に作った家に帰って寝るかな？

そうと決まれば、俺は寝ている栗菜を担いで、家に帰った。

明日が楽しみだ。

第五話

俺は今、強大な敵と相対している。

やつの名は古代怪獣ゴモラ。

体長約40m、主に突進攻撃と巨大な尻尾を振り回して攻撃してくる。その他にも超振動波と言う強力な技を持っている。

やつは今にも俺に襲いかかって来そうだ。

何故襲つて来ないかと言うと駄女神がゴモラに抑止力を働かせているからだ。

俺はと言うと、準備体操的なことをして体をならしている。

「もう、良いかしら?」

白い穴からこちらを見ている駄女神がそう聞いてきた。多分、痺れを切らしたのだろう。「早くしろ」と顔に書いてあるように見える。

俺は「良いよ。」と返した。駄女神もそれに頷いてゴモラに働かせていた抑止力を解こうとしたが、俺はもうひとつだけ確認したい事を思い出したので止めた。駄女神はめんどくさそうな顔をして「今度は何?」と聞いてきた。

俺は、一つの方角に人差し指を向けて言った。

「あの結界は、壊れないんだろうな?」

俺の指を差した方には、ドーム状の結界があり、そこには栗菜が眠っていた。
なぜ眠っているかというと、駄女神を呼ぶ前に俺が催眠術をかけたからである。
だってまた俺が一人で喋っているように見えたら心配するだろうし、
なにより昨日の栗菜が怖かったからだ。マジ、ガクブルでした……
俺の能力でも大丈夫か確認した。大丈夫とでているがやはり心配になっ
てしまう。

「大丈夫よ。私が作った結界よ？ちよつとやさつとじゃ壊れないわ
よ。」

その後、駄女神が「それに……」と言って

「あなたは結界に近づけないでしょ？」
と言ってきた。俺はそれに対して「当り前だ。」と返した。

そして駄女神が最後の確認に「後はもうないかしら？」と聞いてき
たので、俺は「もうないよ。」と答えた。駄女神は「OK」と返し
てきて、カウントダウンがはじまった。

「5……………4……………3……………2……………」

いよいよだ。今までの修行の成果、存分に発揮させてもらおうぞ？ゴ
モラ！

「……………0!!!」

駄女神が0と言った瞬間、ゴモラに掛けられていた抑止力がなくなり、俺に突っ込んできた。

どうやら俺を踏みつぶすらしい。だがその程度のスピード…

「遅すぎるわ!!!」

俺は、ゴモラの右足による踏みつぶしを横に跳んで避けて、ゴモラの右足に向けて蹴りをくらわせた。

俺の蹴りでバランスを崩したゴモラは、俺の方に倒れてきた。

俺は空へ飛んで回避し、そして追い打ちをかけるように俺はゴモラに飛び蹴りを放った。

「ギヤヤアアア!!!?????」

俺の飛び蹴りを受け、ゴモラは苦痛の叫びをあげている。
かなり効いたらしい。

だがやつはすぐに立ち上がり、空中にいる俺に対して尻尾を振りまわして攻撃してきた。

俺はすぐに回避したが、次に拳が迫ってきており、これは躲せない

と思い、受け止めた。

「グッ!???」

かなりの衝撃が俺を襲い、押されはしたが、踏ん張りを効かせ、なんとか踏みとどまった。

そして俺は、ゴモラを投げ飛ばすために、受け止めた腕の指を持ち、背負い投げみたいな形でもいつきり地面に叩きつけた。

ドガアアアン!!!

だがあまり効いてないらしくすぐ立ち上がり、突進をしてきた。それを止めるため俺は

「ボルテックス!!!」

自分の右手から1億5000万V程の電撃を放った。

「グギヤアアアッ!?!???」

ゴモラに電撃が当たり、かなり効いたらしく少し後ずさり、膝をついた。

俺はその隙を見逃さず、右足に気と電気集中させ放つ必殺の飛び蹴り、ライジングキックをゴモラの胸めがけて放った。

「クロス・ライティング!!!」

俺はクロスさせていた両腕を十字型に組んで、電撃光線を放った。それと同時にゴモラも超振動波を放ってきた。

ドガガガアアアツツ!!!!!!!!!

二つの光線がぶつかり合い、光線を中心に周りの地面を抉っている。

マジかよ…この光線には5億Vのエネルギーを注いでいるのに互角の威力かよ。

いや、少しだが俺の光線が押されているな。

このままでは、いつか俺が完全に押されて負けてしまうだろう。だが……

「俺もまだ………全然本気じゃないんでね!!!」

さらに俺は光線にエネルギーを注ぎゴモラの超振動波を押し返した。

「ギヤアガア!!!???」

ゴモラはいきなり自分の光線を押し返されたことに驚いていた。そして押し返された光線はゴモラに命中した。

「だからやめなさいって言うてるでしょ！！駄女神って言うのは！
！」

「じゃあなんて言えばいいんだよ？」

「それは……………／／／／」

おい、なんでそこで赤くなるんだ？おかしいだろ？
駄女神は赤い顔でこちらに言ってきた。

「メリーよ／今度からそう呼びなさい！！／／／／」

「メリーね……………良い名前だな。」

俺がそう言ったら駄女gじゃなくてメリーはさらに顔を赤くした。
なんかかわいいな。あっそうだ。

「あのさ、栗菜のところの結界を解いてもらえるか？もう終わった
事だし。」

「え、ええ。」

メリーはそう言って、結界を解いた。
なんだろう、すごく疲れたな。

「ふぁゝあ。今日はありがとうな。」

「別にいいわよ。暇だったんだし。」

「そうか。俺は少し休むけど、お前はどつする？」

「今日は帰るわ。仕事も少し残つてるしね。」

「そうかい。それじゃあまたな。」

「ええ。またね。」

そう言つて、メリーは白い穴を閉じた。
さて、俺は

「少し寝ますかね。」

俺はそう言つて眠りに就いた。

余談ではあるが、戦いの後を直さないで寝てしまったため、先に起きた栗菜に光が灯っていない目でなにがあつたか聞いただされた。怖かつたです………はい。

第五話（後書き）

今回使用した技解説

ボルテックス

電撃を放ち、相手にダメージを与える。

クロス・ライトニング

胸の前で両腕をクロスして電気エネルギーを溜めた後、両腕を十字型に組んで放つ電撃破壊光線。光線の色は水色。

キャラ設定（前書き）

ただのキャラ設定でございます。

キャラ設定

みなさんはじめまして。雷道一茶でございます。

今回は主人公とオリキャラその他諸々の説明をさせていただきます。

では、どうぞ。

主人公：空守そらかみ来らい

キャラ設定（第五話の時点です）

容姿：逆立った黒髪の短髪で、黒い瞳の日本人独自の容姿。

身長：178？ 体重：62？ 歳：1200歳位 種族：人間

能力

電気と雷を司る程度の能力

能力説明

電気、雷を自由自在に操る事ができる。超雷速（現在1850？秒）で移動・攻撃が可能。また自身を電気と化して、攻撃を受け流す事ができる（攻撃の受け流しはON/OFF可能）。遠くの電波を読み取り、会話・通信を盗聴することができる。全身または、一部分から電熱（現在最高電熱35万）を発する事ができる。電気を吸収することができる。吸収することで体力等の回復が可能（しかし自分の放った電気は吸収出来ない）。雷雲を発生させる事ができる。最大電圧100億V（現在）。電気の色は水色。

永遠に幸福である程度の能力

能力説明

能力の名前の通り永遠に幸福で居られる能力のはず……………？

ありとあらゆることの答えを出す程度の能力

能力説明

ありとあらゆる状況・疑問・謎等の答えを瞬時に出してくれる。だが脳にかなりの負担がかかってしまうので、多用は出来ない。

超人になる程度の能力

能力説明

超人的力が手に入る。超能力・気が使用できるようになる。飛行能力が備わる。宇宙や水中での活動が可能になる。自分に対する外部からの干渉を無くすことが出来る。身体能力チート。破壊以外の光線技が使用できる。

現在（第五話までの）ステータス

飛行速度：マツハ6 走行速度：マツハ3 / 5 水中速度：マツハ2 潜地速度：マツハ1
ジャンプ力：500m 腕力（パンチ力）・握力：1万5000トン 脚力（キック力）：2万トン

無にする程度の能力

能力説明

ありとあらゆること・ものを無くす・無かった事にする事が出来る。この能力は自分もしくは、自分の触れた事のあるものにしかな作用しない。また、無かったことを無かったことにすることが出来る。細かい操作も可能（たとえば、相手の妖力などを徐々に無くすなど）。かなり危険な能力なので本当に危ないときにしか使わないようにし

ている。

今まで使用した技と未使用技

ライトフルレクト（第二話に使用）

白い光の粒子を右掌から放ち、相手の感情を静めておとなしくさせる、興奮抑制光線。

ライジングキック（第三話に使用）

足に電気と気を纏い放つ、超強力な飛び蹴り。

ライトフルエイド（第三話に使用）

青い光の粒子を右掌から放ち、生物の傷・病気等を治す、回復光線。

ボルテックス（第五話に使用）

電撃を放ち、相手にダメージを与える。

クロス・ライティング（第五話に使用）

胸の前で両腕をクロスして電気エネルギーを溜めた後、両腕を十字型に組んで放つ電撃破壊光線。光線の色は水色。

ライトフルバリア（未使用技）

電気エネルギーで作られた円状のバリア。バリアを前進させて押し返したり、バリアを飛び越えて上空から攻撃することが出来る。また、自分を中心にドーム状に張る事も可能。

ライティング・ソード（未使用技）

自分の腕を電気の剣に変えて、攻撃する。

テレポーション（未使用技）
遠くへ瞬間移動することができる。

サイコキネシス（未使用技）
物体の動きを止め、自由自在に移動させる。

まあ、こんなところです。チートですね。自分で言うのもなんですが。

次はオリキャラの設定に移りたいと思います。

オリキャラ：栗菜^{くわい}

キャラ設定（第五話の時点で）

容姿：栗色の髪を腰まで伸ばし、頭には二つの猫耳がある。お尻には5本の尻尾がある（尻尾の数は妖力が上がれば増える）。眼の色は栗色。

身長：164？ 体重：バキツゴキ！！（血 歳：バキツゴキゴ

キツツ！！！！（血血血

種族：仙狸（猫又）

能力

神通力を使う程度の能力

能力説明

六神通とも言う。六つの能力があり、以下のものを言う。

天眼通……遠近、大小かかわらずにどんなものでも見通す力。

天耳通……世の中全ての音・声を聞き分ける力。

他心通……他人の心を知る力。

宿命通……他人や自分の前世を知る力。

神足通……思った所に瞬間移動したり、飛行したりする力。

漏尽通……自分の煩惱が尽き、今生を最後に、生まれ変わる事は

無くなったと知る力。

オリキャラについてはこんな感じですよ。

これで設定を終わらせてもらいます。

おもしろいと思って読んで下さる方々、これからもよろしくお
願いします。

第六話

なんじゃこりゃ？なんでこの村だけこんなに発展してるんだ？俺は遠くからある村を見ていた。

「なあ、なんでここだけこんなに発展してるんだ？」

俺は自分の横にいる銀髪の8歳くらいの少女に聞いた。

「それは、私がいろいろと発明して発展させたからよ。」

「それにしてもすごいですね。こんな村は初めてですよ。」

栗菜が言うのも分かる。俺たちが今まで見てきた人間の村と言えば、まだ藁で出来た家だ。

しかしこの村は違う。壁は木で出来て、屋根は瓦で出来ている。技術的にいえば、江戸時代に近いだろう。

しかもこの村をこんなに発展させたのは俺の隣にいるこの子、八意永琳えいりんだというのだ。まったく信じられん。天才だなまさしく、うん。

なぜ俺達が彼女と一緒に居るかと言うと1時間前ほどの遡る。

- - - - - 1時間前 -

俺はいつも通り修行に励んでいた。栗菜もあのゴモラとの戦いの後からだがいっしょに修行している。

ここまでは普通の日常だった………叫び声を聞くまでは……

「た、助けてッ!?!???」

俺と栗菜はその叫び声に一瞬驚きながらもその叫び声のした方向に向かった。

そこには、人間の少女と無数の矢を刺され屍と化した数匹の妖怪と、まだ無傷で今にも少女に飛び掛かろうとしている四匹の妖怪だった。

俺と栗菜は襲われていた少女を助けるため、同時に駆け出し少女を

襲っていた妖怪を瞬殺した。

「大丈夫か？」

と俺は少女に聞いた。

私の名は八意 永琳。

ある村で研究者兼薬屋をやっているものよ。村で私の事を知らないものはいないわ。私は僅か8歳という幼さでいろいろなもの発明した天才だ。だから村で私の事を知らないものはいない。

今日私は一人で少し遠くに薬草を取りに来ている。いつもなら護衛が付くのだが、私は自分の身は自分で守れると言って置いてきた。自慢ではないが、私は弓術においては誰にも負けはないと思っている。

それにたまには一人でいたいし、いつも護衛付きの部屋で研究をしていたから息抜きには丁度いい。

だが私が薬草を採っているとき後ろから何者かの気配を感じ、振り向いた。

そこには、

「グルルルルウウウ……!!」

獣型の妖怪がいた。数は10匹、倒せない数ではない。

私は自分の武器である弓に手を掛けた。

そして私は先手必勝というばかりに矢を取り、連続で6発放った。私が放った6発の矢は、10匹のうち3匹に当たり、それぞれちゃんと心臓の位置と脳の位置を捉えており、矢が当たった3匹は絶命した。

仲間を殺され、怒り狂った3匹が私にかかってきた。

私はそれを避け、その3匹に矢を放った。

「グギヤギヤーッ!!???」

私の放った矢はまたちゃんと心臓と脳を捉えていた。

私は絶命したのを確認し、残りの妖怪の居る方に振り向いた。

「さて、後は貴方達だけね。」

そう言っただけは弓を構えた。

?……………何か可笑しい。違和感がある。

……………まさか!?

私とその違和感に気がついた瞬間、後ろに気配を感じ振り返った。

そこには、私に襲いかかってくる妖怪がいた。

そう、私を感じた違和感とは、残りの妖怪の数だったのだ。

まさか、私の意識をあの手で襲いかかってくる三匹に集中させて気を逸らすなんて!?クツ?!油断した?!!

私は咄嗟の判断で自分の持っていた弓を盾にして攻撃を防いだ。

盾になった弓は砕け散った。

私は自分の身を守る唯一の武器を無くし、恐怖に駆られた。

怖い……………。

私の中にあるのはただそれだけだった。

私はすぐに、その場から逃げだした。

もうそれしかなかった。

武器を無くした私に勝機はない。ただただ私は逃げた。

しかし、身体能力で人間が妖怪に勝てるはずも無く、すぐに追いつかれ、囲まれてしまった。

怖い怖い怖い怖いッ!?!?!?

囲まれた私はさらに恐怖に駆られ、地に尻餅をついてしまった。

怖いッ！誰か…誰か……ッ！！

「た、助けてッ！！???」

この誰もいない場所で私はその叫びが誰にも届かない事を知っているながらも叫んだ。

「グギヤアア！！！！」

私は目を瞑った。来る衝撃に備え。

だが衝撃は、いつまで待っても来ない。

私は瞑っていた目を開き、目の前を見た。

そこには、殺されていた妖怪と、その妖怪たちを殺したと思われる二人の人が立っていた。

私を助けたと思われる一人の男がこちらに向き、こつ私に言った。

「大丈夫か？」と。

私はその言葉を聞いた瞬間、眼から涙が溢れ、静かに泣いていた。

この涙は自分が生きているということを実感したことからきたのだと思う。

静かに泣いてる私を見て、声を掛けてくれた人が、私に抱きつきこ
う言ってきた。

「怖かったね。もう大丈夫だよ。」

この言葉聞いた瞬間、私はさらに涙が溢れ、今度はその人の胸で声
を出して泣いた。

「大丈夫か？」

俺は襲われていた少女にそう聞いた。
その瞬間少女はいきなり泣き始めた。

ええー！ー！！なんで！？

俺は後ろに居た栗菜に（なんでこの子泣いてるの！？）と、超小声で聞いた。

栗菜は（た、多分、助かった事に泣いてるんじゃないでしょうか？）と言ってきた。

なるほど、だから泣いてるのか。

俺は少女を落ち着かせるために、少女に抱きつき、背中を擦りながらこう言った。

「怖かったね。もう大丈夫だよ。」

すると少女はさらに泣きだし、後ろからも禍々しい殺気を感じた。もう一度言うけどなんでッ！！？？？？

まあ、こんな感じですよ。

「どうしたの？」

永琳が首を傾げて聞いてきた。

「……かわいい。」

「いや何でもないよ。ただ永琳を助けたときのことを思い出していただけだよ。」

俺がそう言つと、永琳は顔を赤くした。

余程さっきの事が恥ずかしかったのだろう。

「……………忘れてくれると嬉しいんだけど？／＼／」

永琳は顔を赤くしてそう言った。

「……………少し弄るか。そうした方が面白そうだ。」

「どうしようかな？」

「なッ！……わ、忘れなさい！！あんなの恥だわ！？？／／／」

そう言って、永琳は腕を回してぐるぐるパンチをしてきた。
ククク、そんなの

「お前ぐらいの背だったら頭を押さえれば当たらないんだよ！」

「この……！！！！／／／／」

ハハハ、かわゆいやつめ。

ゴゴゴゴゴッ！……？？？？

！……？？？な、なんだ？！この禍々しさは？！……
俺はすぐにその元凶の方に向いた。

「……ずいぶん仲良しになりましたね？……来さん？」

……栗菜でした。はい。

「ど、どうしたんだ？く、栗菜？？？」

「いえ、永琳と、とうとううおおおおおおおおおてっっっもおおお仲良しなんだなと思ひまして。」

「いや、そういうわけぞ」

俺が全て言い終わる前に、片腕に永琳が抱きついてきて、こっぴつた。

「そうよ。私たちとっても仲良しなのよ？栗菜さん？」

永琳はこれぞと言うばかりに体を密着させてアピールしている。つてなにしとんじゃ！！お前は！！！！今の栗菜はとてもあぶないんだぞ！！！！

俺がそう思つて永琳を見ると、永琳がこちらに顔を向けて

（私を弄つた仕返しよ。）

と、小声で言つてきた。クソ永琳め！！

「……………なに見つめ合つてるんですか？」

ちょッ！もうヤバイって栗菜、爆発寸前だよ！！！！

よし！奥の手だ！！！！

俺は、目にも止まらぬ速さで腕を動かし、栗菜の頭を撫でた。

すると、あらまあ〜どういいう事でしょう。栗菜から禍々しさが消えたではありませんか。

「ふにゃ〜／＼／＼／」

ここは昔と変わらないぜ。よしこのままやり過ぐせばッ！！！！？？？
な、なんだ？！次はなんなんだ！？？？

俺は新たな禍々しさを感じ、その元凶の方に振り向いた。

「……………」

永琳でした。はい。

あえて言わせてもらおう。

な・ん・で・だ・よッ！！！！？？？？

クソッ！こうなったら！！！！

俺はヤケクソ気味になり、永琳の頭も撫でた。
すると、

「ッ／＼／＼／／」

ビクッ！と一瞬なつたが顔を赤くし、禍々しさも消えた。
ふう、助かったのか？

俺はそう思った瞬間二人を撫でていた手を放した。

二人から「あっ……」「と聞こえたのは気のせいだ、うん。

「なあ、栗菜のこの姿は村に入る時やばくないのか？」

俺は栗菜に指を差しながら永琳に聞いた。

「えっ？え、ええ、そうね。……変化とか使える？栗菜さん。」

「え、う、うん。使えるよ。」

栗菜がそう言った瞬間、ボンッ！という音がして栗菜の周りに煙が発生し、その煙が晴れると人間の姿になった栗菜がいた。

「どづかな？」

と栗菜が聞いてきたので俺たちは

「いいんじゃないか？」「いいんじゃないかしら？」

と答えた。普通に人間に見えるし良いと思う。
よし。

「それじゃあ、行くか。」

「はい。」「ええ。」

右から栗菜、永琳が答え、もう遠くもない村に向かった。

村に着くとみんな永琳の帰りを待っていたかのように

「永琳様お帰りなさいませ！」

「永琳お姉ちゃんお帰り！！！」

永琳はそれに答えるように

「ええ、みんなただいま。」

と、手を振って答えた。

俺は永琳がみんなに愛されているんだな〜と思った。

でかい。なんだこの家のでかさは!!
永琳の家は、普通の民家の数十倍のでかさはあった。

「お帰りなさいませ！八意様！その方々は？」

「私が妖怪に襲われたときに助けてくれたのよ。丁重に持て成して
ちょうだい。」

「!!そうでしたか、旅の方、今回は八意様を助けていただきまこ
とにありがとうございます。」

永琳の家の門番はそう言ってきた。

俺は

「いえ、別にたいしたことはしてないので。」

と答えた。俺はただ助けると言う彼女の声が聞こえたから助けただ
けだ。

門番の人はそれでもと言い、再びお礼を言ってきた。

俺は「言葉だけ受け取っておきますね。」と言い、俺は永琳の後に
続いた。

俺は永琳に部屋に案内され、客室に居た。
ついでに言うと、栗菜は別の客室だ。

コンコン。

俺はノックが聞こえたので、「どうぞ」と言って通した。
ドアが開くと永琳がいた。どうしたんだろっ？

俺は

「どうしたんだ？飯の時間か？」

と聞いた。永琳は「いいえ。」と言ってこちらに来て、ベットに座り今日のお礼を言ってきた。

「今日はありがとう。」

俺は「別にいいよ。」と答えて、永琳の横に座り頭を撫でた。
永琳は、顔を赤くして聞いてきた。

「ねえ、あなたは私の事を見てどう思っっ？」

？意味がわからない？？

「意味が分からないんだけど？」

「私みたいなやつは気持ち悪いとか思わないの？」

「なんで？」

「だって、この村を見て分かるようにここは普通とは違い技術がとでも進歩しているわ。しかもここまで技術を進歩させたのはこの私よ。そんな化け物じみた頭を持った人間を見て貴方は怖くないの？」

「なんで怖がる必要があるんだ？」

そう俺が言つと永琳は驚いた顔をしていた。
俺はさらに話を続けた。

「別に俺は怖くないぞ。それよりもすごいと思った。」

永琳はなんで？って言う顔をしていた。
こころ表情の変わるやつだな。

「だってよ、この村の住人は幸せそうなんだよ。みんな、他の村にはない笑顔で楽しそうにしてるんだ。こんな村は、はじめてだ。永

琳？一つ聞くけどなんでみんな笑顔で楽しそうだと思うっ？」

永琳は俺の質問に「なんで？」と聞いてきた。
俺は答えた。

「それはな、お前のおかげなんだよ。この村に来てすぐ分かった。」

「えっ？」

「みんな、お前が帰ってきたあのときお前に向かってみんなお帰り
って言ってたじゃねえか。それもあんなに嬉しそうによ。みんなお
前のおかげなんだよ。他の人を幸せにできるやつをなんで化け物だ
って怖がらなきゃならねんだよ。」

そう俺が言つと永琳は泣きだしてこつ言つた。

「ありがとう。」

と、俺は優しく永琳の頭を撫でながら「礼を言われるほどじゃねえ
よ。」と言つた。

ご飯の時間になるまで俺は永琳の頭を撫で続けた。

第六話（後書き）

永琳の性格、これでいいのかな？
それとシリアス苦手だ。

第七話（前書き）

もうすぐで新年ですね。

第七話

俺達が永琳の家に住んで、五年の月日が流れた。
えっ？なんで永琳の家に住んでるのかって？

それはな、あの後永琳に此処に住まないか？と言われたんですよ。
それを俺達はOKしたわけさ。

だってさあゝ此処の飯は美味しいし、ベッドはフカフカだしね。
もう良い事尽くしっしょ！うん！

そんな感じでOKして住むことにしたんだよ。

でもそのおかげで修行の方が少し疎かになっただけだね。

しかたないよね。おいしいご飯と、フカフカなベッドが悪いんだ！！

……………すみません。少し八つ当たり気味になりました。

ごめんね？おいしいご飯たちに、フカフカなベッドくん。」

俺がそう心の中で言っていると

「いきなり何を言ってるの？」

永琳がいきなり話かけてきた。

？何を言ってるって何が？

もしかして口に出していたのか？

俺は（こいついきなり何を言ってるんだ？）的な眼で見てきた永琳に
聞いた。

「俺の思っていた事口に出てた？」

「貴方の思っていた事かは分からないけど、「おいしいご飯たちに、フカフカなベッドくん。」っていきなり言いだしたわ。大丈夫？具合でも悪いの？新しく作つたくす」「断るッ！！！！………まだ全部言っていないじゃない。」

全部言わせないほどに俺はお前の薬に恐怖を抱いてるんだよ！！
お前の薬の実験台にされた数なんて、もう十回以上なんだぞ！！！！

「全部言わなくても分かるわ！ボケ！！どうせまた薬の実験台にでもする気だつたんだろ！！もうその手には乗らないぞ！」

俺は、永琳にビシッ！と指を突き立てて言った。
すると永琳は呆れ顔になった。………なんで？

「バカね貴方は。」

「なッ！！何がだよ！！！！」

「私がいつ貴方を実験台にしたのよ。私はただ貴方に進めただけよ？別に無理やり飲ませたわけじゃないわ。」

ググッ！！た、たしかにそう言われてみれば、前もあのときも俺か

ら薬は飲んだ。だが！！

「最初のは違うぞ！あれはお前に飲まされたぞ！！」

「……………そうだったかしら？」

俺は、なら最初の間はなんだ！と、問いただそうとした時、不意に誰かが俺の部屋のドアにノックしてきた。

その瞬間永琳は俺のベッドの下に隠れた。……………

…なんで？

「失礼します来様。」

と、スーツ姿でビシッと決めた永琳の家の使用人が入ってきた。

「どうしたんですか？」

俺は使用人の方にそう聞いた。

「はい。来様、永琳様を見かけませんでしたか？」

「永琳ですか？え〜とですね……………」

なるほど、だからベッドの下に隠れたのか。大方したくもない研究を無理やりやらされていたのだらう。

うん。ばらすのもいいけど、後が怖いからなあ〜黙っておこう。

「今日は見ていませんね。」

「そうですね。ありがとうございます。もし見かけたらご連絡お願いしますね。では、失礼します。」

使用人の方は、そう言い部屋を出ていった。……………ぶつ。

「もう出てきて良いぞ。」

俺はベッドの下に隠れている永琳にそう言った。するとベッドが少しのそのそと動き、永琳が出てきた。俺はベッドの下から出てきた永琳に聞いた。

「なんだ？また興味もなくなてしたくない研究でもやらされていたのか？」

俺がそう言つと永琳がコクツと頷き、

「まあ、そんなところかしら。」

と言ってきた。まあ、たしかに研究なんてどれも詰らなそうだな。……俺から見てだけどさ。

「なんで今回の研究は興味がないんだ？」

「だって、現代でなんで今更太陽光による発電を強要するのよ。昔なら興味も湧いたでしょうけど、現代じゃ興味すら湧かないわ。」

たしかに、言われてみればそうだな。今の時代、核融合と核分裂を繰り返させることでエネルギーを生み出してるからな。危険ではあるけどちゃんと制御は出来るし、この方法の方がエネルギーを生み出す量がどの方法よりも多いしな。

「なら太陽光により手に入るエネルギー量より、核融合と核分裂によるエネルギー量の方が多く、効率が良いみたいなこと言ってやればいいじゃねえか。」

「言ったわ、でも上の方は今更核融合と核分裂によるエネルギーの生産方を危険視し始めたのよ。だからこっちに変えろって言ったのよ。」

本当に今更だな。この方法は永琳による幾多の実験により完全に制御出来ていると証明されたのにな。

核融合と核分裂をさせているタンクがある建物だって、地震や火事

などに耐えられる設計なのに。

「お前の研究成果が信じられない奴でもいるのかね。」

「多分そうじゃないかしら？例えば私が天才すぎて嫉妬する輩とかね。」

と、黒い何かを出しながら永琳はフフフと笑い言った。

なんだろう、栗菜とはまた違う迫力があるな。

よし、今後永琳をあまり怒らせないようにしよう。

俺は少し場違いな決意をしながら永琳に言った。

「まあ、上が何言おうと俺は永琳の味方だからな。上がお前に何かしようと、俺は盾となり、剣となってお前を守り、お前に危害を加える敵全てを砕いてやるよ。」

..... ヤバイ！

絶対に恥ずい事言ったぞ俺！！何が「盾となり、剣となって」だよ！！厨二病じゃねえか！！

恥ずかしい！！顔赤いよ絶対！！

永琳だって笑って..... あれ？

「..... (モジモジ.....)」

………永琳さん？

なんで顔を赤くしてモジモジしてるんですか？

マジでやめて！俺ももつと恥ずかしくなるから！！！！／／／／／／／
それから二人は言葉を発しなくなり、この状態がかれこれ30分ほど続いた。

「もう行くわね／／／」

永琳がいきなり言葉を発して沈黙が破られた。

「お、おう／／」

お互いまだ少し赤い顔を向けながらそう言った。

そして永琳がドアノブに手をかけて、部屋を出るときに言ってきた。

「その、あ、ありがとう／／／と、とても嬉しかったわ／／／」

「そ、そうか、仕事頑張れよ？／＼／」

俺がそう言つと永琳は「うん／＼／」と言って出て行った。

ああ〜！！熱い／＼／そうだ！散歩でもして外の風に当たろう！！

俺はそう思い、部屋を出て外に向かった。

第七話（後書き）

永琳本当にこんな感じでいいの？

第八話（前書き）

少し遅れましたが小説をみてください。みなさま、あけましておめでとございます。

これからも東方超雷光をよろしく願います。

第八話

「……………ハア。」

俺は、重いため息を吐いた。

何故こんな重いため息を吐くかと言うと、俺が永琳に厨二臭いセリフを言つて一週間、永琳と一度も会話をしていないのだ。

見かけて声をかけようとすると、あの時の事を思い出して声がかげずらくなってしまうのだ。

永琳もそうみたいで、目線が合ったときなんてお互いに顔を赤くしてその場を立ち去ってしまうのだ。

「……………ハア」

本当にどうにかならないかな？と考えていると

コンコン

ドアを叩く音が聞こえた。俺は、「んっ？誰だろう？」と思いつながらドアの向こうに居るであろう人物に「どうぞ。」と言った。

ドアが開き、出てきたのは

「失礼します。来さん。」

栗菜だった。どうしたんだろう？俺はその疑問を栗菜に投げる。

「どうしたんだ栗菜？」

「はい、そ、そのですね……………」

？本当にどうしたんだ？いきなりモジモジしちゃって。言いたいことがあるれば、ハッキリ言えばいいのに。

「言いたいことがあるなら言っただらァン。怒らないから。」

「い、いえ！違います！！怒られるような事じゃなくてですね。そ、その！此処一週間来さんの元気がないなと思ひまして、訪ねてみたんですけど。……………何か有りましたか？」

……………俺って、顔に出やすいのかな？
自分じゃそんな気しないんだけど。

「……………顔に出ていたかな？」

「いえ、その、なんて言いますか、雰囲気がいいつもと違ったような気がしまして。」

雰囲気であって……俺としてはいつもと同じように振舞っていたんだけどな

栗菜には分かったちゃうか。

「すごいね、雰囲気だけで分かったちゃうなんて。たしかに何か有ったと言えは有ったね。」

「そうですね。その、何か力になれませんか？私、来さんの役に立ちたいんです！」

栗菜………くう〜！！なんて良い子を持ったんだ俺はッ！！！！！！

よし……！！良い子良い子してやるぞ……！！

ナデナデ ナデナデ

俺がいきなり栗菜の頭を撫でると栗菜は顔を赤くして言った。

「／／／／い、いきなり何するんですかッ！！／／／／」

「いや〜良い子を持ったな〜と思ってさ。」

俺はうん、うん、と頷きながら頭を撫で続ける。

栗菜も顔は赤いけど嫌がっているわけじゃないしね。

そう俺が思っていると栗菜が

「そ、それよりも何か私の力になれる事はありませんか！／＼／」

と言ってきた。おお、忘れてた忘れてた！

栗菜の撫で心地があまりにも良いから、忘れていたぞ。

「そうだな、まずは一週間前の事を話すよ。」

「なるほど。そんな事があつたんですか……………」

俺はマッハを超える速度でコクッ！！！コクッ！！！と頷いた。
何故なら栗菜から黒い何かがでているからである。

なんだー！ー！ー！ー！この可愛さはッ！ー！ー！ー！

顔を赤くした状態で潤ませた瞳、それに上目づかい……………！！

完璧だ……………ッ！！俺の可愛いと思う状態ランキング上位が全て揃ってやがる……………ッッ！！！！！！

俺は頑張って平常心を保ち栗菜のそれに答えた。

「と、当然だろ？栗菜だって俺の大切な仲間なんだから。」

俺がそう言つと少し栗菜が不機嫌になった。

……………本当になんで？

その時栗菜は「仲間……………仲間ですか……………」繰り返して言った。
どうしたんだ？本当に。

「来さん。」

「?はい。」

俺はいきなり名前を呼ばれて今度は少し間抜けた返事をした。

「それはまず、一度永琳と二人でお話しする必要があります。」

「う、うん。まあ、分かつてはいるんだけどなかなかその話す切っ掛けが掴めないと言いますか……………はい。」

俺がぎこちなく栗菜に言うと、彼女は「ハア」と一回ため息をついた。

多分呆れているのだろう。

俺がそう言うと栗菜は「わかりました。」と言って

「私が今日の夜、ここに彼女を呼びます。」

えっ?……………えええええええ—————!!!!!!
こっ!!此処って!!!俺の部屋だよ!?

「お、俺の部屋だよ!???」

俺が栗菜にそう言うと彼女は不気味な笑みを浮かべ

「大丈夫です。私は、彼女の秘密。たくさん知っていますから。」

それを聞いた瞬間、俺は背筋がゾツとした。

それと同時に俺は、栗菜ってこんなに怖かったっけ？と思った。

「そ、そうか？それじゃあ、お願いします。」

何故か最後は敬語になりながらも俺は、ペコリつと頭を下げて言った。

栗菜は、「任せてください。それでは失礼しますね？」と言って、俺の部屋を出て行った。

私は今、ある人の部屋に向かっている。

その人の名は空守 来。

数年前に私を妖怪の群れから助け出してくれた人だ。

だが、その人の部屋に行きたくない。

なぜなら一週間前、私が興味のない研究を無理やりさせられそうになり、彼の部屋に行った事が切っ掛けだ。

その時私は、嬉しい思いをしたと供に恥ずかしい思いもした。

それから、彼を見ると顔が熱くなり直視できない。

それは、彼も同じらしく、私と目が合った時彼は顔を赤くしていた。そんな事が有ったのに何故、私が彼の部屋に行く事になったかと言うと、始まりは今日の昼だった。

私はいつも通り自分の興味のある事の研究に集中していた。だが、それは一つのノック音によって破られる事になる。

コン コン

不意にその音が聞こえ、私は反射的に「どうぞ。」と言った。扉が開き、入ってきたのは

「失礼しますね、永琳？今空いてる？」

栗菜だった。私は一体「どうしたのだろう？」と思った。彼女が私の部屋を訪ねるなんてあまり無いからだ。

「どうしたの？貴女が私の部屋に訪ねてくるなんて珍しい。」

私がそう言っていると彼女は笑みを浮かべながら言った。

「少しお願いが有って今日は来たの。」

「お願い？何かしら？」

「今日の夜、来さんの部屋に行ってほしいの。」

私は来の名前を聞いた瞬間、顔が熱くなった。

それと同時に何故私が彼の部屋に行ってほしいのかが気になった。それに今は彼の部屋に行きたくない。あの事が有ってから一度も話していないのだ。

「な、なんで彼の部屋に行ってほしいのかしら？／＼」

私は多分少し赤くなっているであろう顔で聞いた。

多分栗菜は何かと理由が有って来の部屋に行ってほしいのだろう。

「どっついても行ってほしいの。」

と、彼女は少し、真剣な瞳で言ってきた。

私はその瞳に少したじろぎながら言った。

「ど、どうしてもって。ちゃんとした理由を言ってちょうだい。じやないと、行かないわよ?」

私がそう言つと、彼女は不気味な笑みを浮かべて言ってきた。

「そうですか、行かないんですね。わかりました、それじゃあ、永琳があんな事やこんな事をやっている写真を町住にばら撒いてもいいんですね?」

彼女はそう言いながら、私のプライベート写真を見せてきた。

そ、そんなもの! いつの間にも!!

私がそう思っていると、彼女が近づいてきて私の耳元でこつ囁いてきた。

「どうします? 行きますか?」

そう、これは完全にお願いと云つ名の……脅迫だった……。

こんな感じで脅迫に負けた私は、今彼の部屋の前にいる。
私は大きく深呼吸をして少し顔を赤くしながら彼の部屋の扉を叩く。

永琳、本当に来るんだろうか？
栗菜の話では、来る事になっているが。

でも、来たら来たで、全然話せないような気がする。主に恥ずかしさで。

……もしかして俺ってヘタレ？

いやーいやー！違う！断じて違うぞー！

俺はヘタレなんかじゃない！………多分………

俺が色々と思っていると

コン コン

部屋のドアを叩く音が聞こえた。

き、来ちまったー………！

えーと、ど、どうしよう！そ、そうだ！まず部屋に入れよう！

俺は少しぎこちない声でドアの向こうに居るであろう永琳に「ど、どうぞ。」と言った。

するとドアが開き、少し顔を赤くした永琳が「し、失礼するわね？」と言って部屋に入ってきた。

俺は「お、おう。」と言ってドアのところ立っている永琳に自分の隣に座るように促す。

彼女もそれに従い、俺の隣に座る。

………

どうしよう……… 会話が浮かばない。

でも……この場は俺がなんとかしなくてはならない！

原因を作ったのは俺なのだからな！うん。

「あ、あのさ！」

「な、何かしら？」

えーと！何かないか！何か！！そ、そうだ！！
俺は咄嗟に思いついた事を言った。

「永琳ってさ何カップなの？」

これを言った瞬間、永琳が顔をさらに赤くして、フリーズした。
って何言ってるんだ俺ええ！！！！！！

いきなり女性の胸の大きさ聞くななんてこれじゃあ変態じゃねえか！
！！
いや、気になっただけだけど、聞く事じゃねえだろ俺！！！！！！

永琳だつてまだ顔を茹でダコみたいに赤くしてフリーズ状態だぞ！
！！
ええい！！何か言い訳しないと！！！！

「えつと！！じよ、冗談だよ！！今の冗談！！！！ご、ごめんな？い
きなり変なこと言ってる？」

俺がそう言つと永琳はフリーズ状態が解けて、赤い顔で

「い、いえ！／＼だ、大丈夫よ／＼／＼」

「そ、そうか！」

また、ここでお互い何も喋らなくなり、場は静かになる。
これが五分位続き、俺はようやく決心をした。

「え、永琳！」

「な、何！？」

俺は永琳の名前を呼ぶ。いきなり名前を呼ばれた彼女は驚いていたが俺はそんな事をお構いなしに座っていた場所から床に土下座してこう言った。

「一週間前は変なこと言つて、すみませんでした！！！」

俺はそう永琳に謝つて、彼女の返答を待った。
だが、一向に彼女からの返答はこない。
俺は恐る恐る顔を上げて彼女の顔を見てみると

「ぷっ………!!………ぷっ………!!」

………笑っていた。なんで？

「ちよっ！なんで笑うのさ！」

「だ、だって！なんだかおかしくて………！」

いやいや！どこがおかしいのさ!?

俺っつば頑張って決心して誤ったのよ？

それなのに笑う事はないでしょ？

「俺すっごく頑張ったのに笑われるって………。」

なんか、ズーン………な気持ちだわ。

そんな俺を察してなのか永琳は

「い、ごめんなさい。少し笑いすぎたわ。」

と誤ってきた。俺は

「別にいいよ。もう気にしないわ。」

と言って、終わらせる。

あれそう言えば、

「永琳。」

「何かしら？」

「なんか俺達ってもういつの間にか普通に話せてるよな？」

俺がそう言つと永琳もそれに気づいたらしく「あつ。」つと一言声を漏らした。

それから二人とも可笑しくなったのかいきなり笑いだした。

今思つとさっきまでの自分たちがバカらしく思えてくる。

「なんか今思つと、さっきまでの自分たちがバカらしく思えてくるな？」

「ええ、そうね。」

永琳がそう言つといきなり立ってドアの有る方歩き出した。

俺も立ちあがって、彼女に「帰るのか？」と聞いた。

すると彼女は、こちらに振り向き話してきた。

「一週間前の事ね、私ね本当にとても嬉しかったの。誰にもそんな事言ってもらった事がなくて。だから……」

そう彼女が言つと、俺に近づいてきて

チュッ

!!!!!!!!?????////////

口にキスをされ、俺はいきなりの事で固まった。

そんな俺にお構いなしに彼女は

「これはそのお礼よ／＼」と少し顔を赤くして出て行った。

俺はその後も固まった、ままだった。

第九話（前書き）

結構頑張って長く書いてみました！

第九話

永琳にキスをされて、八年が経った。

えっ？また恥ずかしくて喋れなくなっただんじやないかって？

フツ……………俺と永琳とて同じ過ちはおかせないさ。

次の日はちよつとあれだったけどさ。

さて、こんな話はもう終わりにして、今の状況を教えるよ。

俺は栗菜と一緒に永琳の部屋に居る。

何でも、とても大事な話があるようだ。なんだろう？

「大事な話って何だろうな？」

そう俺が栗菜に聞いた。

「何でしょうね？……………もしかしてこの頃妖怪の活動が活発になってきている事についてでしょうか？」

「そついや、この頃妖怪どもの活動が活発になってきてるな。」

俺たちがそんな事を話していると

ガチャッ

不意にドアが開いた。そこには、ここ数年で服のセンスがガタ落ち

した永琳がいた。

「来？今、失礼な事を考えなかったかしら？」

こめかみに青筋を浮かべた永琳が言った。
いきなりの事に俺は少し慌てて否定した。

「い、いや！何も失礼なことは考えてないぞ！うん。」

だつて本当の事だし。
俺がそう考えていると

ヒュヒュヒュツ！ トン！ トン！ トン！

後ろの壁に矢が刺さっていた……って！

「い、いきなりナニをするんですかエイリンサン？」

俺は少しビビリながらも永琳に聞いた。
しかも弓矢なんてどこにしまったの？

「ごめんなさい。少し手が滑ってしまつたわ。」

と、笑みを浮かべて言った。

……目が笑っていません。もう何も考えないでおこう。

次に何か変な事を考えたら………殺される………ッ！

俺は少し冷や汗をかきながらも永琳に笑みを向けて言った。

「そ、そうか、手が滑ったなら仕方がないね!!」

「ええ、そうね。」

お互い笑いながら言う。俺は少し引きつりながらだが。

そんな状況に呆れた栗菜が言ってきた。

「二人ともおふざけはそれ位にしてください。それで永琳、今日は
いったい何のようで私たちを呼んだの？」

「ごめんなさい。今日貴方達を此処に呼んだのは、近々実行する計
画についてよ。」

俺と栗菜は「計画?」と言って頭を傾げる。

永琳は「そうよ。」と言って俺たちに説明する。

「ここ最近、妖怪たちの活動が活発になってきている事は貴方達も
知っているでしょう。」

「ああ。何故かは知らないけど活発になってきてるな。」

俺は答える。栗菜も声には出していないものの、首を縦に動かして肯定の意を示す。

「ええ。それで何故妖怪たちが活発になってきているかなのだけれど、なんでも此処に攻め込んでくるらしいのよ。」

……………えっ？マジ？

「……………えっ？マジ？」

俺は心に思った事を口にした。
栗菜もそう思っているだろう。

「マジよ。」

「でもそれと永琳の言う計画がどう言った関係があるの？」

栗菜が頭に？マークを浮かべて言った。

「今、私が何を作っているか分かるかしら？」

「たしか、ロケットだろ？」

「ええ、そうよ。」

「何か関係があるのか？」

「ええ。」

「????ますます意味が分からなくなってきたぞ？」

妖怪が攻め込んでくると永琳が作っているロケット、どう言った関係性があるんだ？

.....まさかね.....

「まさか月にも行くのか？」

俺は「まさかねえ」と少し笑いながら言った。

永琳の顔を見てみると、驚いた顔をしていた。えっ？もしかして合ってます？

「.....もしかしてホントに行くのか？」

「え、ええ。よくわかったわね。」

.....えええええー.....!!!!!!

マジかよ！？本当に行くのかよ！！？？？

「ほ、本当に行くの！？」

栗菜が驚きながらも永琳に聞いた。

永琳は「本当よ。」と言って続きを話してきた。

「それでね、情報だと妖怪たちは五日後に攻めてくるらしいのよ。だから私たちはこの計画を四日後に実行しようと思うの。」

「フムフム。」

「それで貴方達さえ良ければ何だけど、一緒に月に行かないかしら？」

「フムフムって！月にか！」

「ええ、そうよ。どうかしら？」

月かあゝ興味はあるけどな。行きたいほどじゃないし、それに俺は地球の方が好きだ。

「やめとくよ。俺はやっぱり地球が良いし。」

「私もやめときます。」

俺たちがそう言つと、永琳は少し悲しそうな顔をして「そう……」
と一言いった。

そんな顔すんなよと思ひながら俺は少し悲しそうな顔をした永琳の
頭を撫でた。

いきなり撫でられた永琳は顔を赤くして驚いた。

「な、何するのよ！？／＼／」

「何つて、撫でてるんだけど？」

「や、やめてよ！／＼昔みたいに子供じゃないんだから／＼／」

「なら悲しそうな顔をすんなよ。別にさ一生会えないわけじゃない
んだからさ。」

「何言つてるの！？月に行くのよ！？もう会えるわけないじゃないの！……！」

すると彼女から一筋の涙が流れた。俺は少し動揺したが、すぐに永琳に言った。

「大丈夫、会えるよ。」

「なんで……よ。」

俺は彼女の正面を見据えて言った。

「なんでって、俺の感が言ってるんだよ。俺たちが離れてもいつか遠い未来で会えるってさ(多分)。」

俺がそう言つと、永琳はきょとんとしていきなり笑いだした。

「フッフ、貴方がそういうと本当にいつか会えそうね。あゝあ、悲しくて泣いてた私がバカみたい。」

それに釣られて栗菜も笑う。………なんで笑うのさ。

俺としてはけっこうカッコよく決めたつもりなんですけど。

まあ、永琳が泣きやんだんならそれでいいか。

「永琳、これで話は終わりか?」

「ええ、これで終わりよ。」

俺は「OK。」と言って部屋の出口に向かって行く。
栗菜も俺の後に続き向かう。

「それじゃ、永琳。またな。」

自分の感を……………。

不意に俺は横に居る永琳の顔を見る。やっぱり少し悲しそうな顔をしている。

俺は少し元気づけてやろうと永琳の肩を抱き言った。

いきなり肩を抱かれた永琳は驚いていた。

「大丈夫だって！いつか会えるからさ（多分！）。だからそんな顔するなよ。」

俺がそう言うと永琳は小刻みに震えながらこっちに顔を向けて言った。
てきた。

俺はこの時に見た永琳の顔が今までのどの時よりもとても美しいと思った。

ほんのりと赤みの差した顔に、少し潤ませた綺麗に輝く瞳。

「それじゃあ私のお願い聞いてくれる？」

「内容にもよるな。」

俺がそう言うと彼女はほんのりと赤い顔をさらに赤くして言った。

「……………て……………」

？なんて言ったんだ？声が小さすぎて聞き取れなかったぞ。

／／／

告白イベントを自分が体験する事になるなんて。で、でもこんな顔普通で取りえなんてない自分でいいんだろつか？永琳は天才でしかも美人、いわゆる才色兼備ってやつだ。そんな人が自分に釣りあうなんて思えない。本当に俺みたいなやつで良いのだからつか？

「永琳。」

「何？／／」

「本当に俺で良いのか？ハッキリ言って俺って顔普通の取りえなし人間だぞ？」

俺がそう言うと永琳は俺の言った事を慌てて否定し始めた。

「そんな事ないわ！貴方はとてもカッコいいし！それにとっても優しいわ！！」

「そ、そうかな？なんかそこまで言われると照れると言うか何といるか／／／」

俺が照れながらそう言うと、彼女も自分の言った事が少し恥ずかしかつたのか俺に謝ってきた。

「い、ごめんなさい。」

「い、良いよ。それにさ俺そんなに自分の事言ってもらった事がなくてとても嬉しかったよ／＼もう一度聞くけど本当に俺で良いの永琳？」

「ええ／＼／」

永琳がそう言った瞬間、俺は彼女の事を思いつきり抱きしめて、一言いった。

「俺も好きだよ、永琳。」

と。

優しく、そう言った。彼女もそれに答えて

「私もよ、来。」

そう言って二人の顔が近づく。そして

「ちゅ……んんっ……れるっ……」。

重なり合う。八年前とは違い今度はお互いの口内に舌を入れ合う深

いやつだ。

「ちゅ……ちゅ……れるっ……んんっ……ふう。」

どれくらいお互いキスをしていたのだろう。おそらく数分位はしていた。

俺がそう思っていると永琳が続きと言わんばかりに顔を近づけてきた。

もう一度二人の距離がゼロになるところで………それは起きた。

ドガア!!!!!!!!!!

俺と永琳はその音に体を強張らせる。

一体何事だと思っていると永琳が俺から離れてすぐ近くに在った無線を繋げて言った。

「どっしたの!?!」

永琳がロケットの管理室に聞いた。

『た、大変です!?!妖怪どもが攻めてきました!?!』

「「なっ!?!」」

俺と永琳は驚いた。明日攻めてくるはずの妖怪がなんでもう攻めてきてるんだ!

「どっいうことだよ!攻めてくるのは明日のはずだろ!?!」

すると永琳は気難しい顔をして、小声で一言いった。

「もしかして情報が漏れていた?」

「そんな事あるわけないだろう。此処の情報管理は完璧なはずだろ。」

「分からないわ。それよりも早く住民を集めないと……!!」

「なら、お前は早く住民を避難させる!」

俺はそう言って此処を出て行くこととする。
永琳に呼びとめられたが、無視して行く。

「うわゝ結構いるな。」

目の前では戦争がもう始まっていた。
少しであるが人間達が押されぎみだ。それもそのはずだ。
まずは数が違いすぎる。いくらこっちの武器が優れていようと、
妖の方が人間の約十倍の数はいる。

「まあ、惚れた女のためだ。行くか!!」

「何が惚れた女のためなんですか？」

「おわあっ!!???」

いつの間にか後ろに栗菜がいました。はい。

「く、栗菜!?!いつの間にいたんですか!?!」

「うわ〜結構いるな。」「辺りです。」

最初っからって事ですかい。

「そんなことは良いんです。それより惚れた女のためとはどう言う意味ですか？」

「……………そのままの意味だよ。さっき永琳に告白されてOKしたんだよ。」

そう言うと栗菜は驚いた顔をした。それと同時に小声で「そうですか……………とうとう……………」となんか言ってるが今は無視して早く戦場に行こう。見てみると結構やばい。

「あ、あのー！」

「な、なんだ！もうそろ行かないせ、好きですー！……………へ？」

「私も来さんの事好きですー！／／／」

そう言って栗菜は俺にキスをしてきた。永琳とした深いやつだ。キスが終わると栗菜は顔を赤らめて

「私、行きますね／／」

と言った。

.....マジか／／／／／

ええ、栗菜も俺の事が好きとか／／／／

もしかして.....

！.....！！

.....これがモテ期ってやつなのか

と、くだらないことを考えていると一つの妖力弾が飛んできた。

俺はそれを躲して飛んできた方向を見る。そこには栗菜が居た。

あ、はい。早く来いって事ですな。

「今行くよー！！」

そう言っただけ俺は、戦場に身を投げた。

その頃、町の中では

「みんな！焦らずに逃げてちょうだい！」

私と兵隊達が住民の誘導をしていた。

三機ある巨大なロケットの中で一機目が住民やお偉いさんによって満員になるところだ。

だが、まだ二機ある。まだまだ時間がかかる。心配なのはそれまで外で戦っている兵たちが持つからだ。

……普通を考えて無理だろう。聞いたところによると妖怪の数はこちらの約十倍らしい。

いくらこちらの武器が強力であろうと数で襲われてはさすがに不利である。

だから私は信じる。私の呼びかけに答えず戦場に行ったであろう最愛の彼を。

「頑張つて、来。」

そう一言いって私は住民たちの避難を再開した。

あれから外は

「ライトニング・ソード!!」

俺は右腕を電気の剣に変えて妖怪に切りつける。

グギャー!! ギャガ!! グガガ!!

と叫びをあげて妖怪が倒れて行く。

俺が加わった事によってこちらの人間は善戦をしている。

栗菜の方も人間の姿のままではあるが他心通や神足通を使って善戦をしている。

「シネ!ニンゲン!!」

そう言って俺に周りに居た妖怪どもが一斉に襲ってきた。

それを俺は超雷速で回避して奴らの上空に留まった。そして両腕をクロスして電気エネルギーを溜める。

「ウ、ウエダ!!」

一体の妖怪が気付いたがもう遅い。俺は溜めたそれを腕を十字にして放つ。

「クロス・ライティング!!」

俺の放った光線はそのまま直進していき周りに居た妖怪全てを巻き込んだ。

今ので数百体くらいは殺せたはずだ。

そんな事を考えていると下から無数の妖力弾がきた。

「ライトフルバリヤ!!」

俺は円状のバリヤを張って全て防いだ。

防いだ後、俺は電気エネルギーをリング状にしたものを両腕から放った。

「サンダースラッシュ!!」

電気エネルギーでできたリング状のものを両腕合わせて二十発放ち、それをサイコネシスで操り妖怪たちにつつけた。すると妖怪たちは次々と切断されていき、死んでいった。

俺はサイコネシスでそれを操りながら自分も両腕をライトニングソードに変えて戦った。

どれくらい戦っただろうか？もうロケットは二機が月に向けて飛び、あと少しで三機目つてところだ。

一緒に戦ってきた兵たちはみんな俺が町の方に戻して俺と栗菜しかない。妖怪の数も半分以下に減ってきた。俺は大丈夫だが栗菜がもうそろやばい。妖力もかなり減ってきている。

「栗菜！もうさがれ！！」

俺が栗菜を心配して言う。俺の能力さえ使えば妖力や体力を全開にして戦わせる事ができるが、これ以上栗菜には戦ってほしくないし、この程度の数なら俺だけで十分だ。

「ハア……ク………！だ、大丈夫です！！ま、まだ戦えます！！」

嘘つけ！もう息が上がってるんじゃないか！！

「もう一度言うぞ！おっと！？ちっ！危ねえだろうが！！」「グギヤ！！」「もうさがれ栗菜！！！！」

俺は今度は少し威圧して言う。

「……………！！……………はい、分かりました。ご武運を。」

俺はそれを拳を天に突き上げて答えた。

それを見た栗菜は、町の方に戻って行った。

さてと

「SHOW TIMEだ。妖怪ども。」

「これで住民は全員なの！」

私は兵の一人に確認を取る。

「はい！全員あります！！！」

「そう。私達も乗って出発するわよ！！！」

「し、しかしまだ来様達が！！！」

兵の一人が言ってきた。

音の方向を見るとロケットが月に向かって行くのが見える。
俺はそのロケットに向けて心の中で言った。

また会おうぜ……永琳。

と。

もう見えないところまでロケットが上がって行った。

よし！

俺は栗菜のところまで一気に飛んで行った。

まだ生き残っている妖怪百匹くらいが俺に一斉に妖力弾を放ってきたがそれを躲しながら行った。

「栗菜！旅に出るぞ！！」

俺が空からいきなり現れて、驚きながらも栗菜が言った。

「た、旅について何処にですか！？それに妖怪たちはどうしたんですか？」

「まだ百匹くらい生きてるぞ。別にもう戦う理由が無くなったからな。何処に行くかは不明だ。旅ってそんなもんだろ？それに妖力が

回復して、もう万全な状態なんだろ？ほら、行くぞ！」

そう言っただけ俺は空を飛ぶ。もちろん全速力じゃないよ？

それに続いて栗菜も「ちよっ！何処が万全に見えるんですかって！

ま、待ってくださーい！」と言いながらも飛ぶ。

さてさて、何処に行こうかな？

第九話（後書き）

今回使用した技説明

ライトニング・ソード

自分の腕を電気の剣に変えて、攻撃する。

クロス・ライトニング

胸の前で両腕をクロスして電気エネルギーを溜めた後、両腕を十字型に組んで放つ電撃破壊光線。光線の色は水色。

ライトフルバリア

電気エネルギーで作られた円状のバリア。バリアを前進させて押し返したり、バリアを飛び越えて上空から攻撃することが出来る。また、自分を中心にドーム状に張る事も可能。

サンダーズラッシュ

手に電気エネルギーをリング状にして溜めて放つ。相手を切断するために使われる。サイコキネシスで操りながら戦うこともできる。

サイコキネシス

物体の動きを止め、自由自在に移動させる。

他心通

神通力の一つで、他人の心を知る力。

神足通

神通力の一つで、思った所に瞬間移動したり、飛行したりする力。

今回は少しエロくなってしまいました／＼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7245y/>

東方超雷光

2012年1月9日00時46分発行